

芸術作品による幸福感

私は、2005年11月に、藤沢市制施行65周年記念講演の「藤沢市民オペラ」に、総監督・畑中良輔先生の強いご推薦を頂き、プッチーニの遺作「トゥーランドット」のカラフ王子役でご出演させていただき、巨匠ベリオ補作の「トゥーランドット（ベリオ版）」を、ミラノ初演に続き、病理学者の私ならではの解釈で心を込めて歌い演じ、プッチーニの魂がみごとに舞台に表象されていたと高い評価を頂くことが出来ました。

高名な音楽プロデューサーの中野雄（なかの たけし）先生が、音楽雑誌「モーストリー・クラシック 2010年11月号（通巻第162号、2010年9月18日発行）」の『上杉春雄（ピアニスト）と米澤傑（テノール） ― 天は二物を与える？ 医学と音楽の二足のわらじ ―』と題する記事の中で『日本の医学界に、「東の上杉、西の米澤」と並び称される鬼才が活躍している。』とご紹介くださり、続いて、「モーストリー・クラシック 2013年1月号」（通巻第188号、2012年11月20日発行）」に、『再認識しよう ― 脳は決して疲れない 天が二物を与えた上杉春雄と米澤傑の後日談』をお書きくださり、さらに、「モーストリー・クラシック 2019年8月号」（通巻第267号、2019年6月20日発行）」の「天は二物を与える」という記事の冒頭に、上杉春雄先生と私のことをお取り上げくださり、上杉先生と私を「医師で音楽を趣味にする人は多いが、このお2人は音楽もプロ ---- 「プロ級」ではない。」とお書きくださっていただき、天にも登る至高の嬉しさと共に、一層、身の引き締まる想いで、これからも精進を続けて参りたいと、心を新たに致したところです。

上杉先生と私は、NHKの「芸術劇場」という番組でも、「二つの顔をもつ音楽家」として取り上げられました。また、私は、NHKのラジオ深夜便にもたびたび出演いたしております。

そして、中野雄先生は、2021年9月に発行されました「モーストリー・クラシック」（通巻第294号、2021年発行）に『天は二物を与える・再論 医師・テノール歌手 米澤傑の現在』という記事で、私の「医学研究」について、この上なく判りやすく、かつ正確に記述くださり、私の「音楽への道」につきましても、「声楽との出会い」から、名指揮者の方々との共演や「トゥーランドット」に至るまでを躍動的にお書きくださり、イタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが、「米澤は大学教授選挙への道を選択、日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ。」とおまとめくださっています。

さて、私の病理学的研究の対象である「がん」の発生を停止させることは、現代医学を持ってしても極めて困難ですが、私は、「がん」を一刻も早く発見し、治療に役立てたいという発想から、「がん」を見つけ出す目印になる「がんマーカー」の研究に没頭して参りました。それが積み重なり、日立技術情報サービスから発表された「各種がんマーカー論文」の著者・世界ランキングで第6位、日本人では第1位となり、日本病理学会で最高の名誉である「日本病理学賞」も受賞いたしました。実際に、「がん」の早期発見に有用な試薬を開発し、特許を取り、すでに市販されて、社会の役に立っています。

さて、この論説のテーマ「芸術作品による幸福感」についてお話をいたしたいと思います。音楽・・・私の場合は声楽ですが、コンサートにおける演奏、オペラでの舞台や、CDのような録音作品は、もちろん「芸術作品」です。一方、医学分野における「研究論文」も、まったく同じ「芸術作品」であると認識しております。この音楽と医学の異なる二つの分野の「芸術作品」には、共通した「長い長い苦しみ」と、各々を成し遂げた時に味合う「一瞬の幸福感」という共通点があります。

皆様が、お聴きになる「オペラアリア」や、ご覧になる「オペラの舞台」、一方、世界中の研究者が読む「研究論文」は、全て、出来上がった「最終産物」ですが、各々の最終地点に至りますまでには、「長い苦しみ」の道程（みちのり）があります。その「長い苦しみ」の「最終産物」である CD 「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」にも収録されており、キャッチフレーズとしても題していますオペラ「トゥーランドット」のアリア『誰も寝てはならぬ』は、トリノ・オリンピックでのフィギュア・スケートで、荒川静香さんが、この「トゥーランドット」で演技し、金メダルを獲得して以来、フィギュア・スケート放送の際のテーマミュージックのようになっていきます。この曲の最後の「超高音」を上手く歌えるかどうか、オペラ「トゥーランドット」が成功するかどうか掛かっていると言っても過言ではございませんので、大変なプレッシャーを乗り越えて歌わねばなりません。

五線譜より遥かに高い音を歌わなければならないテノールは、名高いプロ歌手も含めて、みんな、とても怖がりです。マリオ・デル・モナコやフランコ・コレリリといった世界的に有名なテノール歌手達も、オペラ公演の際、すでに、衣装も着けて舞台袖にいるにも関わらず、「もう、今日は、声が出ない・・・帰る！」と言って逃げ帰ろうとするので、何人かで抱きかかえ、奥様とマネージャーが、お尻を蹴っ飛ばして、舞台に押し出した、という逸話が残っています。

「テノールの超高音」・・・それがまた聴かせどころで、聴衆の皆様は、その一瞬を身を乗り出してお聴きになられますので、その「超高音」の時には、会場全体が大波のように私に迫ってきます。まさに、「トゥーランドット」での第3幕に歌われる『誰も寝てはならぬ』の最後の「ヴィンチェーロ！」と歌います超高音は、その典型で、ここで、そこが上手くハマって会場に響き渡れば、ブラボーの嵐の「幸福感の絶頂」に包まれる訳です。そこに達するには、繰り返し・繰り返しの地味な練習と、私の師匠で世界的ソプラノ歌手・松本美和子先生の厳しいレッスンを積み重ね、さらに、本番のプレッシャーに押しつぶされそうな「恐怖感」を乗り越えねばなりません。それらを乗り越えての舞台上、上手く歌え、あるいは、オペラを演じきった時の「一瞬の幸福感」を、数え切れない程、経験してきました。しかしながら、その幸福感は、まさに“一瞬”で、次の、そして、また、次の演奏会への「長い苦しみ」の始まりでもあります。

ダビンチの「影は光より大きな力を持っている」という言葉からしますと、私も、無意識のうちに「影」を感じて歌っているのかも知れませんが、「人類愛（フィーリア）」までの領域には程遠いのですが、舞台までの、地味な練習の「長い苦しみ」と、舞台本番前の「恐怖心」は、まさに、“言語を絶する苦勞”でして、その苦勞は、もしかしたら、ダビンチのいう“影”で、それが、宇宙とまでは言えませんが、演奏者と聴き手の間で、複数の波を重ね合わせるとき、波が打ち消し合ったり強め合ったりする“干渉”という、量子物理学でいう「量子コヒーレンス」という物理現象の伝搬となって、聴く側の「幸福感」に繋がっているのかも知れません。

能・狂言の極意で、世阿弥が述べています「離見の見（りけんのけん）」という言葉があります。「離見」とは、“離れて見る”と書き、「客観的に見られた自分の姿」のことを言ひまして、「離見の見（りけんのけん）」とは、演者が、自分をはなれ観客の立場で自分の姿を見ることで、自分の演技について客観的な視点をもつことを言ひますが、それを、自分が歌っている時の感覚に当てはめてみますと、表向きには、どんなに、泣き笑いや怒りを表現する場合でも、常に冷静な自分が、良い発声で歌えているかを見張っている、ということに共通すると理解して良いかと思っています。

マリオ・デル・モナコもフランコ・コレリも 60 歳で引退し、パヴァロッティも、トリノ・オリンピックの開会式という晴れの場で『誰も寝てはならぬ』を半音下げで歌っていました。ドミンゴも、最近では、ほとんどの歌をキーを下げて歌うか、バリトンの歌を歌っているという「現実」に鑑みます場合、果たして、自分はいつまで歌って良いのか・・・いつも自問自答をしながら、「離見の見（りけんのけん）」で自分を見張っております。

医学的には、全ての疾患は「加齢」が一番の危険因子ですから、全ての人類に平等に起こってくる「加齢」には、どう対処しようもなく、体型を維持して、筋力を維持することしかありません。その為に、エレベーターやエスカレーターを使わず、せっせと階段を登り降りし、自家用車を使わず、公共交通機関を使って出来るだけ歩き、スクワットや、お相撲さんが稽古で行う「摺り足」のような筋トレを行うという毎日を送っています。一方の「精神面」では、四国・鳴門市の出身である私は、毎日、朝夕、仏壇の祖父母と両親に向かって、弘法大師空海の「真言宗」の『南無大師遍照金剛』を唱えるのですが、実際には会えない祖父母や両親を不思議と身近に感じ、それが、医学と声楽の「長い苦しみ」を不思議と和らげくれるのです。もしかしたら、この何気ない「日常」や、日々の『南無大師遍照金剛』こそが、インドの哲学書「ウパニシャド」の根本思想で、宇宙の根本原理である「梵（ボン）」と、個人の本体である「我（が）」とは同一であるという『梵我一如（ボンガイイチニョ）』に繋がってゆくのではと、勝手に理解しております。

医学研究におきましては、繰り返し・繰り返しの地味な実験、症例の蓄積や詳細な観察、そして、英文論文を書き上げて投稿いたしましても、格の高い医学雑誌ほど、門前払いで掲載拒否をされることも多く、門前払いでなくとも、レフェリーによる厳しい査読により、実験のやり直しや書き直しなど、「長い苦しみ」を経て、再投稿をし、場合によっては、何度も再投稿を繰り返したのち、“アクセプト”という論文採択の知らせが届いた時に「一瞬の幸福感」を味合え、「芸術作品」である「研究論文」が誕生します。でも、その時には、すでに、次の段階の研究が始まっており、「長い苦しみ」は、屋根瓦のように積み重なってゆきます。

「長い苦しみ」の後の「一瞬の幸福感」についてお話しして参りましたが、ただ一つの例外は、ヒットチャートで度々第 1 位を獲得致しました、私の CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」の完成です。もちろん、永遠に残ってしまう CD の録音に臨みますには、録音に選曲した曲目の準備、しかも、松本先生からは、「日本人の声ではなく、イタリア人の声で歌う」という命題が課され、その準備期間の「長い苦しみ」は並大抵のものではありませんでした。また、医学部教授の現役時代にヨーロッパに赴いての録音でしたので、5 月の連休を使うしかなく、4 日間連続で歌い続け、15 時間で、15 曲を収録するという強行軍で録音を致しました。オーケストラの方々から「あんた、良く声が持つね！」とおっしゃって頂きました。松本先生もライナーノートに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。」とお書きくださっています。そのようにして完成した CD は、自分で申し上げるのもいがか、とは思いますが、とても良い出来栄であり、「一瞬」ではなく、私の寿命よりも長生きする、ほぼ『永遠の幸福感』と言えます。

これまで、自分の「芸術作品」による自分の「幸福感」を申し上げてきましたが、では、自分の「芸術作品」が、果たして、他人に幸福感を与えられているのか、また、他人の「芸術作品」から自分は幸福感を得ているのか、ということを考えてみたいと思います。

まず、自分の「芸術作品」は、他人に「幸福感」を与えているのか？、ということですが・・・私の芸術作品のうち、少なくとも「研究論文」は、他人に幸福を与えていると確信できます。私の研究論文は、世界中で沢山引用され、私の研究が、第三者の研究のヒントになり、また、研究結果を評価し考察するのに多に役立ち、次の段階の新しい論文が誕生し、また、それが次の論文の誕生に繋がる、というように「ネズミ算」式に繋がってゆく訳ですから、「研究論文」は間違いなく「幸福感」に寄与し、それら研究論文から得られた科学的新事実、新しい薬や治療法の開発に繋がり人類の幸福に寄与します。そういうことで、研究論文という「芸術作品」は、明らかに、他人をも、大きく言えば、人類に「幸福感」をもたらす訳です。

では、私の歌・・・そもそも、私の歌が「芸術作品」であるかどうかを自分では判断できませんが、私が出演したオペラ公演やコンサートの際に、沢山のブラボーをいただき、演奏会後には、沢山の褒めのお言葉、お手紙、メール、インターネットへの書き込み等を頂いていますので、お客様には「幸福感」を感じていただいているかも知れませんが、世間には「お世辞半分」という言葉もありますので、こればかりは、自分では、客観的な結論は出せません。

一方、私のCDは、かの有名なピアニスト・辻井伸行さんのCDや、佐渡裕（さど ゆたか）さん指揮の辻井さんのピアノ協奏曲のCDを抜いて、売り上げチャートの第1位になり、マイケル・ジャクソン氏が急死して大きな話題になった時でも、彼のCDを抜いて、売り上げ第1位でしたので、そのように沢山の方々にご購入いただけたということは、第三者に「幸福感」を与えることができているという、比較的客観的なデータかも知れませんが、私のCDは、楽天市場で、正規価格でご購入いただけますが、Amazonでは、「五つ星」の評価と共に、正規価格の3倍以上のプレミアがついた値段で売られていまして、大変驚くとともに、こういう面からも、第三者に「幸福感」を与えることができているのかな、と自己満足をしています。

では、私は、他人の「芸術作品」から「幸福感」を得ているか？ということを考えてみます。ルーブル美術館や、モネの邸宅を訪れて、様々な芸術作品を鑑賞した際や、高名な陶芸作家の作品展など、美術作品からは、かなり高い頻度で「幸福感」を得てきました。

一方、音楽からはどうかというと、必ずしも、百発百中ではありません。私は、ウィーンで開催された国際病理学会の折に、ウィーン国立歌劇場で「アンドレア・シェニエ」を鑑賞しました。公演直前に、支配人が静々と舞台上に現れ、大変申し訳なさそうな顔で、「本日のテノールの主役が急遽出演できなくなりした。代役は、プラシド・ドミンゴです。」と述べた途端、会場は、割れんばかりの歓声に包まれ、とてもラッキーに、プラシド・ドミンゴの「アンドレア・シェニエ」を鑑賞することが出来ました。ただ、ドミンゴの「アンドレア・シェニエ」を生で聴きました際、世界最高のテノールを目の前で見て聴くという感動はあったのですが、現実には、ドミンゴの声は、フルオーケストラに埋もれて、“何となく聴こえて来る”といった程度のもので、レコードやCDで聴く程の迫力は全くありませんでした。ドミンゴを直接見たという「感動」と共に、「世界最高のテノールでもこの程度か」という“ガッカリ感”と、「ああ、こんなものでいいんだ」という、歌う側に立った“妙な安心感”とが、今でも鮮明に蘇って参ります。恐れ多くも、世界最高の歌手にさえ、遠慮ないことを申し上げてしまいました。

「産業医」資格取得のための講習会で「騒音障害」の講演を聞きました際、オペラ歌手の「騒音レベル」は100デシベルで、フルオーケストラの「騒音レベル」は110デシベルとのことでした。「log」のレベルで違う、この10デシベルの差はどうしようもなく、オペラ公演の際には、オーケ

ストラはオケピットに入っているの、何とか対抗できるものの、生のオペラ公演で、ドミンゴの声が“何となく聴こえて来る”程度であったことに、妙に納得がゆきました。さらに、クラシックのオペラが作曲された頃に比べますと、各々の楽器は改良に改良を重ね、そのパワーはずっと強力になっていますので、私は、フルオーケストラとの共演で歌います際には、リハーサルの際に、今、申しあげました「10デシベルの差」のことを申しあげ、オーケストレーションが厚い部分は、オーケストラのボリュームの「忖度」をしてくださるようお願いをしています。

さらに、歯に衣着せぬことを申しあげます。改良を重ねてパワーを持った器楽の演奏会では、度々「幸福感」を得られるのですが、ドミンゴでさえ、今申しあげたようなことですから、日本人の音楽家の演奏会では、かなり高名な方々の演奏会でも、満足のゆく「幸福感」を得られたことは、ほとんどありません。レコードやCDの録音のように、人工的に手を加え、歌手の声の前面に出るように細工された「人工産物」に耳が慣れてしまった状態で、「生」を聴いてしまいますと、ドミンゴを聴いた時のような、「アレっ!？」ということが起こる訳です。そういう現象は、綺麗な写真や映像を見たことのある実際の現場に行った時にも経験します。実際に目の前にある景色より、構図を考えたフレームに入り、色やコントラストを調整した写真や映像の方がずっと綺麗なのです。

フルオーケストラとのコンサートであれば、先程、申しあげたような、ヒトの声の限界という大きな関門がありますが、日本人の音楽家のコンサートでは、ピアノ伴奏の演奏会でも「幸福感」が得られたことは殆どありません。うんと踏み込んで、遠慮会釈もなく、私の「心の底」を申しあげます。「自己否定」のようなことを申しあげますが、骨格の構造からして、浅い声しか出せない日本人に、深い声が要求される「西洋音楽」を歌うことが、そもそも不可能であると思っています。さらに、生まれて此の方、西洋文化の中で育っていない日本人に、西洋文化の真髄である「西洋オペラ」は、どうしても「物真似」でしかないように思われます。逆を考えてみましょう。「青い目の歌舞伎役者」がいますか？居ませんよね。日本人が「西洋オペラ」を演じるということは、西洋人が「歌舞伎」を演じるということに等しい訳で、満足のゆく「幸福感」が得られる訳がありません。オペラ公演でなくとも、日本人の浅い声で、西洋音楽の歌を聴かされても、満足のゆく「幸福感」を味わったことがあまりない、というのは、以上のような理由によると思っています。一方、お金さえ出せば、世界レベルの一流楽器を手にいれることができ、音楽でいえば、西洋人と同じ骨格を得たことになる器楽の演奏会では、満足のゆく「幸福感」が得られるのだと思います。

すなわち、「日本の歌」を日本人が日本人の声で歌えば、聴く方は十分満足でき「幸福感」を得られるのでしょけれど、イタリアオペラをはじめとして、「西洋の歌」は、西洋人と同じ発声ができている歌手の歌を聴かない限り、聴く方は「幸福感」を得ることはできないということになります。私のCDの録音に際して、松本先生が「日本人の声ではなく、イタリア人の声で歌うように」とおっしゃったのは、今、申しあげましたことを考慮されてのことであつたと理解しています。一般的な通説にも、私の身勝手な本音を述べます。「Carusoの前にCarusoなし、Carusoの後にCarusoなし」と良く聞かされて来ましたが、Carusoの録音を聴きますと、正直申しあげまして、当時の録音技術の未熟さを差し引いても、その歌唱は、全て、ただ楽譜を追っているだけで、とても単調で、「歌心」や「情感」が全くなく、少なくとも、私自身は全く感動せず「幸福感」は得られません。「現代の3テノール」の方が、遥かに、歌心に溢れていて魅力的です。カレラスの「トスティ歌曲」などは、その「歌心」や「情感」は筆舌に尽くし難いほど素晴らしいです。

この文章をお読みになる皆様方のご批判は覚悟の上で、私の「心の底」を全て正直に申しあげました。私は、表向きに綺麗ごとだけを並べるのではなく、「心の底」をさらけ出しあつて議論すること

こそ、「人類愛（フィーリア）」に近づける唯一の方法であると確信しています。

(2021年10月10日記)